

## すべては

華宮 遼

すべては、夢。

夢、だと信じるほうが簡単だろう。

でもあたしは信じない。あの日のできごとは夢なんかじゃない。

今年は少し遅く咲いた桜の花びらが舞う生ぬるい午後。あたしはいつものように、気だるさを払拭するように自転車をこいでいた。自分の足が生み出す心地よいリズム。右、左、右、左、右、左……。時には激しいロックテイストで、時には優雅なバラード調で。

「あたしってミュージシャン？」

そんな自分に酔いしれながら、自転車をこいでいた。

目的地などなかった。ただ何かを拭い去りたくて、自由気ままなミュージシャンになりたくて、あたしは自転車をこいでいた。

あたしは都内のいわゆる（シンガクコウ）と呼ばれる高校に通う二年生。ごくごく普通の家庭で育った。父親はナントカ庁で働く国家公務員。母親は専業主婦。昔は保母さんだったって聞いたけど。あ、今は保育士さんって言うんだっけ。あと、妹が一人いる。美紅、なんてかわいい名前だ。中三になったから、親は「受験、受験」ってうるさいけど、本人はもう行きたい高校も、それに見合う学力もきちんと自分のものにしていくみたいだ。将来はデザインの仕事をしたいのだ、とあたしにだけこっそり教えてくれた。

あたしはと言えば、周りがそろそろ真剣に進路を考え始めている中、一人宙ぶらりんだ。働き蜂のようにがむしゃらに勉強しているわけでもなければ、アゲハ蝶のような派手な身なりをしてヒラヒラと遊んでいるわけでもない。でも、なぜか勉強はできる。できてしまふ、と言ったほうがいいだろうか。学校の試験でも必ず二十番以内には入るし、模試を受けてもたいいていの大学はA判定が出る。

そんなあたしを学校は放ってはおかない。

「萩原、お前はどこの大学を狙ってるんだ？ まあ、お前ならどこでも大丈夫だろうがな」

「私、特に行きたいところはありません」

「じゃあ、がんばって東大狙ってみるか？ 日本の最高峰」

「別に、大学行かなくてもいいです、私」

「何を言ってるんだ。正気か？」

「はい」

「今まで何のために頑張ってきたんだ？ 第一、親御さんが悲しむだろう」

「はあ」

「とにかく、じっくり考えるんだな。自分のことなんだから」

話にならない。

「アンタのほうが正気か？」

担任の口ぶりを真似てひとりごちてみる。あたしは別に頑張ってなんかいない。ましてや親のためになんか。

あたしはただ、自転車をこいでいたいのだ。それがあたしが考えた結論。だからといって競輪選手になりたい、とかそんなものではない。気持ちよく走りたいだけ。陽のふりそそぐ心地よい川べりを、通ったことのない路地裏を、行き先の見えない、果てなく続く一本道を――。

「沙綾？」

ふと、我に返る。

賢吾が訝しげな表情であたしを見ている。賢吾とは約一年の付き合いになる。そう、あれも確か、桜が綺麗な緑をたたえ始めた頃だった。特に意識することもない、普通のクラスメートだった賢吾に告白されたのが始まりだった。初めは驚いたけれど、屈託のない笑顔と素朴な話しぶりは私の心にすんなり入ってきた。

「どうしたの？ ぼーっとして」

「ううん、なんでもない。ところでさ、賢吾って進路決めたの？」

「うん、俺やっぱり司法試験受けたいからさ、早稲田か中央の法学部にしようと思って」

「へえ。賢吾ってやっぱ、しっかりしてるね。あたしなんか今日ポンチョに『東大狙うか？』とか言われちゃったよ。何考えてるんだろうね、あのおっさん」

ポンチョとは担任のあだ名。名字の「本条」が転じたものだ。

「沙綾なら十分じゃない？ 東大だっただこだっただ入れてよ」

「やりたいこともないのに大学なんて行ったってしょうがないよ。あたしは賢吾と違うもん」

「そっか。でももったいないなあ。ま、ゆっくり考えなよ。自分の将来なんだしね」

・・・なんだ。こいつもポンチョと一緒に。あまりにも同じことを言うのであたしは笑いをこらえるのに必死だった。あたし流、必死の形相。

よく晴れた土曜日だった。あたしは学校で強制的に受けさせられる模試を受けた。行きたい大学も、いや、大学進学すら迷っているあたしが模試を受けること。それは、ただ自分の存在を確認するための作業でしかなかった。客観的に評価される自分の成績。無機質に並ぶ棒グラフ。なんの価値があるのかわからない数字の羅列。それが、あたしがあたしを知る、唯一の方法だった。

模試が終わると外はまだ十分に明るかった。

「さて」

つぶやきながらあたしは自転車にまたがる。高校入学と共に新調してもらった真っ赤なボデイの自転車。(いちごと)勝手に命名してかわいがっている。毎朝一緒に、帰りは賢吾も交えていちごとの時間を楽しんでいる。本当は模試の帰りも賢吾と一緒に帰りがったが、それだけは聞き入れなかった。休日はいちごとの時間を優先したい。そりゃあ、たまにはデートだってする。ごくありふれたカップルのように。腕も絡ませれば、人陰でキスもする。でも、私にとって、いちごは賢吾と同じくらい、いや、もしかするとそれ以上に大切な存在なのだ。

風が気持ちいい。頬を掠める空気が心を緩みきった心を刺激する。今日はどこを走ろうか、考えるだけでわくわくする。いちごとのデートはやっぱり最高だな、あたしはぼんやりと考える。

どのくらい走っただろうか。陽はだんだん傾いてきている。見回すと、見たこともない景色。住宅街だ。北に向かって走ったはずだから、北区か板橋区あたりだろうか。それとも、埼玉県に突入しちゃった？ 今日中には家に帰れないかもしれない。まあ、それもいや。明日は休みだから、梨々子の家に泊まることしよう。数少ない親友の梨々子。梨々子は美しく聡明で、あたしの性格と、いちごにフォーリンラブなことをよく理解してくれている。いちごとのデートで遅くなって帰れなくなった時、あたしは梨々子の家に泊まっていることにし、自分はそこら辺の安ホテルか漫画喫茶で夜を明かす。ラブホテルに一人で入ったこともある。

こぐ、こぐ、走る、走る、こぐ、走る。

脳内のアドレナリンさえ悲鳴を上げるほどにあたしの気分は高揚していた。いつにも増してあたしは騒ぐことしか能のないお笑い芸人のようにテンションを上げ、すっかり真っ暗になった夜を疾走し続けた。こぐ、こぐ、走る……。

それは突然の出来事だった。

海。

目の前に海が広がった。誰もいない、何も無い、

「どうも、海です。」

と言わんばかりの漆黒の海が。

目を疑った。いくらあたしが気も狂わんばかりにいちごをこいで走ってきたとしても、まさか日本海に出てきてしまうほどではないだろう。北に向かって走ったのは確かだ。あたしの腕時計に付いている方位磁針がそれを教えてくれる。だから、これは東京湾などではない。

あたしは動揺した。今までいちごといろんなどころへ来たけれど、こんなことは初めてだ。辺りを見回しても家どころか街灯すらない。ひたすら、闇。どこから空でどこから海でどこから陸なのかわからない闇に、あたしは落とされた。いちごと共に。

慌てて携帯を取り出す。そうだ、こういうときのための携帯ではないか。携帯できるから携帯電話。すばらしいネーミングだ、などと改めて感心する。幸い、あたしの携帯には自分の居場所が確認できる機能が付いている。携帯を開く。

——圏外。

もはやこれまで。賢吾や梨々子に連絡することさえできない。ならば、元来た道を引き返そうと振り返るが、あたしがどこからやってきたのか知る術はない。あたしの後ろには道などなかった。あるのは海と闇、そして、いちご。

砂浜、と思われる場所に寝転がってみる。まだ四月になったばかり。砂はひんやりと冷たかったが、あたしの冷静さを取り戻してくれるにはちょうどよかった。さつきはあんなに晴れていたのに今は曇っているのか、月や星は見当たらない。

「さて」

再びつぶやく。これからどうしようか。目をつぶって考える。このままここで眠ってしまうと風邪を引くのは間違いないだろう。しかし、選択肢はそれ以外に見当たらなかった。

眠ると体温が下がるので、できるだけ起きてみよう。「寝るな！寝たら死ぬぞ！」一人で冬山登山隊を演じてみる。そして夜が明け始めたら、すぐ周辺を散策しよう。

その時。

「一人ですか？ 寒くないですか？」

突然の声にあたしは驚いた。あたしといちご以外、誰もいないと思っていた。コーヒーかなんかを飲んでいたら「ぶっっ！」と吹き出していたに違いない。まるで漫画の一コマのように。何も飲んでいなくてよかったと、軽く安堵するあたし。

目を開けるとそこにはあたしと同じくらいの歳だろうか、若い男の子があたしの顔を覗き込んでいた。

「あ・・・はい、一人です。ちょっと寒い・・・ですね」

ゆっくり体を起こす。

「よかったらこれ、羽織って」

あたたかそうなフリースのジャケットが差し出された。

「あ、ありがとうございます。でもあなたが寒くなっちゃいませんか？」

「僕は大丈夫。寒さとかあんまり感じないんだ。それにいつもここにいるから、もう慣れ